

名護山見れや 殿なつかしや 殿の住ましゆる 山じやもの

(名護屋に伝わる俚謡)

馬渡島

馬渡島は呼子より郵便船で一時間の海上にあり、キリシタンの島として有名です。人口五〇〇〇人位ですが、新村と本村に分れ、新村がキリスト教、本村が佛教信者です。新村には、立派なドーム式の教会堂があり、女の修道院もあり、本村とは風俗を異にし、アンゼラスの鐘の音に異国情緒を漂わせています。

## (傳説)

神功皇后にまつわる話

- (1) 熊襲征伐の途中 仲哀天皇は崩せられ、神功皇后は、熊襲左蔭から採っている、朝鮮の新羅を討つために、その夏四月王島川に乘られて釣糸を垂れ、戦勝を祈念された所、鮎がつれたと傳えられます。
- (2) 皇后は一旦香椎に帰られ、男装して再び、松浦の地に来られ、九月鏡山で御鏡を捧げ、天神地祇に祈念されました。鏡神社は、此の鏡を神体として皇后を祭つてあるとのことです。
- (3) 皇后は船出の途中、今の湊の道筋で鹿に会われましたが、それが逢鹿の駅という地名が出来、後相賀と変化しました。

- (4) 湊の地名も、この時皇后が軍船を集められたことから、湊と云うようになりました。
- (5) 皇后は神集島に数日止まれ神々を集めて戦勝の祈願をされた處と傳え、同島の住吉神社は、その時の満珠千珠の二留を納めて祭つてある由です。
- (6) 湊の土器神社は、皇后が戦勝を祈り、土器に酒を注いで海神を祭られた處に、社を建て、祭りしました。
- (7) 大友、小友と云う所が呼子にありますが、これは皇后が愈々船出のため、男装の御臂の轡を落されたので、轡が生れ、現在の大友、小友となつたと傳えられます。

諏訪神社の傳説

洪崎の諏訪神社は、仁徳天皇の頃、朝鮮百濟から王仁の子菴末が、朝廷に鷹を携えて来たが、当時鷹の使い方を知りませんでした。新羅の鎮守將軍だつた大矢田宿跡の孫に諏訪の前と云う美しい娘があり、鷹を使う方法を知っていたので、鷹飼育係として都に召されて居る内、菴末と戀仲になつたが、菴末が愈々帰国の日が来たので、共に松浦の里に帰り、別れを惜んで、共に一日鷹狩りをしました。鷹ははからずも、麻、小豆、胡麻の茂つた畑中で鷹に巻き殺されました。鷹は帝に申訳ないと案じ、遂に病み伏して亡くなつたのであります。

菴末も娘の死を傷んで、えま甲い此地に留まりましたが、この事が朝廷に知れ、諏訪神社の号を賜り、鷹を刻んで神宿とし、鷹の羽を神紋としました。その為め、今日も尚、麻、小豆、胡麻を作ると、蟻が出ると云つて作らず、お諏訪様の砂を貰つて蟻除けにする風習があります。毎年五、六月頃は参詣者で大賑ひ致します。

『ひらもち(蟻)喰うな 虫喰うな、お諏訪さんの砂振るぞ』と云うまじない謠もありま